KSKT　NO. 82

# えっさほいさ

◆やわた作業所・ほっと・きろろん 後援会だより◆

二〇〇三年十一月二十七日第三種郵便物承認　毎月九回発行（2・5・8の日発行）

2017年度
後援会定期総会
記念講演

## 相模原事件とこれからの社会保障
### ―この人たちを世の光に―

講師　立命館大学産業社会学部准教授　田村　和宏　氏

### 発達とは

はじめに自己紹介を兼ねながら、発達についてお話していただきました。

人の発達とは。その人が意味を感じたことに向けて自主的に自分を変えていくことが自己変革。そういうことを積み重ねながら自分でかけがえのない自分づくりをしていくことが自己実現で、それらの過程が、発達というのではないかなと話して下さいました。人から行動を変えさせられるとか、問題だからとその行動をやめさせられるとか、できるようになるために一生懸命そればかり練習させられるとか、そういうことではない。その人らしく生きていくということをいかに社会の中で積み上げられるか、あるいは、そういうことを応援できるかということが、正しい発達を支える人たちの仕事なのかなあと、分かり易く教えてくださいました。

田村先生は、私たちの理解を深めるために、親しくされてきた重度の障がいがある方のビデオも見せながら、グーとパーでのコミュニケーションの工夫なども紹介していただきました。

そして、高等部で修学旅行の広島の原爆資料館で、人が亡くなった後の影だけが残っている展示の前で、顔を真っ赤にして怒っていたという様子などを報告して下さいました。知的にも重度の障がいがあっても、生きるとか安心して暮らせることを奪ってしまったことに対する怒りがあった。その後、この人は大きく変わって発達されてこられた。

### 障がい者殺傷事件から問い直すべきこと

単なる個人が起こした殺人事件ではない。残虐で例を見ない殺人事件だけどそれで終わってはいけない。「障がい者は幸せになれない」「不幸な存在だ」という考え方で、幸せになる人とならない人、あるいは社会にとって必要な人と不必要な人、というふうに分けて、要る奴だけは残しておくというような昔の優生思想による判断で、容疑者が要らない奴と判断するだけでなく、生きる権利まで奪ってしまった。

この人はどうしてそのような考え方になったのだろうか、この人はやまゆり園の臨時職員でもあって、そこで働いていたのに、通常、そこにいる障がいのある人と向き合っていたら、そこでなんらかの学びとか、生き方に触れる中で、変わっていかねばならないのに。

もしかしたら、今の実践現場の職員が個として任される仕事が多くなってしまっていたり、支援計画を書くことに一生懸命になって自分の担当のことはわかるけど、ほかの人たちのことはよくわからないといった、狭い範囲の中で頑張ることを迫られるような状況が原因じゃないだろうか。職員同士の話し合いで、間違っているような見方を修正できるようなことがなくて、狭い見方・価値観を膨らませて

やわた作業所・ほっと・きろろん総会は、6月25日にやわた作業所で記念講演に続いて行い、全議案が新年度役員とともに承認されました。

いったのではないだろうか。今、多くの職場で、疲弊感や孤立感により、やりがいを持ってやれなくなってきているのではないか。こういう人が出てくるような職場の問題、そういう状況を作っている社会の問題を、何とかしなければならない。

きょうされんの藤井さんはこの事件を現在日本の投影だと言っておられる。社会の問題として見直す時期にきている。

## 社会の責任・権利保障

社会の投影、７０年も前にそういうことを言って、実践してきた糸賀さん。重度の障がいのある子どもに、「この子らを世の光に」と言ってきた人だが、スタートは『浮浪児狩り』への怒りであった。終戦直後路頭に迷う子どもたちを、治安も悪いから『浮浪児狩り』と称して「収容」した。糸賀さんは、子どもは何も悪くない、子どもたちを保護すると言うべきだ。路頭に迷わせたのは大人の責任だ。社会の責任で、それに気づいた自らの責任として自分も近江学園をつくった。その戦災孤児の中に、知的障がい者も多く含まれていた。

一人一人の発達をきちんと保障していくことは社会の責任なんだ。それは戦災孤児だけでなく、障がい者も同じだ。知的障害のある人たちの方がより権利をないがしろにされていた。その際、社会の役に立つか否かを問われてきた。重度の障がい者は要らないとなっては容疑者と同じ立場になる。

## 重度障害者も発達し生産する

糸賀さんはまず、どんなに障がいの重い人でも発達はするし、自己変革や自己実現をしていく存在だということを発見する。この子ら一人一人を輝かせることが、すべての人間を輝かせることにつながり、健全な社会として輝かせることになるのではないか。重度の障がいのある子どもをそだてても、仕事ができるようならないのではないのか、生産活動は無理なのではといわれてきた。

糸賀さんはそれに答え、この子たちの自己実現していることに二重の意味がある。自分を作っていく、作り変えるという生産活動をする。重い障害の人でも変わることで、どんな人も生きるということに向かって輝くことが大事なんだと、考え方を変えるという生産活動をする。目の前の障がいのある人と一緒に遊び、一緒に生活をしてその中で変わっていく子どもたちを見て、糸賀さん自身や周りの人を変えることができる。社会に役にたつかどうかという価値観を変えていくそういう生産をする。

問い直すべきは社会の在り方。社会の責任者として、発達を保障していくような政策を進めなければならない。

## 「社会責任の後退の動き」の部分は省略しました。

## 格差拡大が、弱者攻撃の構図に

「生活保護なめんな」と小田原の担当課の職員が生活保護をうける人を恫喝する。「自業自得の人工透析患者なんて、全員実費負担にさせよ！」「今のシステムは日本を滅ぼすだけだ！」と、いう政治家志望の著名人もいる。

山田先生(日本福祉大学)の、生活保護についてのアンケート調査の結果、高所得層の方が、生活保護は努力不足だと言っている。低所得の人は、雇用環境が悪化していくことなんだという回答が多い。

弱いものがより弱いものを攻撃するというより、所得の高い人たちが見誤っている。所得の格差を少なくしていくことが正しい平等だという意識を作っていけるのでは。格差が大きい程、格差間の攻撃や負の感情がおこってきて、マイナスの価値観が高まり、実質的な平等を作る方が連帯が芽生えてくるのではないか。

## 有無を言わせない姿勢

国会では、共謀罪法案や改憲の動きの中で、あるものをないと言わせたり、少数意見を排除して独裁的な政治が展開されている。力によって有無を言わさずごり押しをするという姿勢が、犯人の姿に重なっている。国の政治の在り方が、事件に繋がっている。

## 地域から、多様なつながりを

まずは、身近な所のつながりを強めながら、国の言う「わがこと丸ごと」ではない、対抗軸の地域共生、地域の中での住民との緩やかなつながりを作っていく必要がある。そのことが有って、地域で生きる安心感がうまれる。これは、自立支援法を廃止に追い込んだ運動以上に、高齢者の分野や子供の分野などの、分野を超えてつながるところに持っていくことが必要。

そういう意味で言うと糸賀さんの、「この子らを世の光に」という言葉は、単に障がい者殺傷事件に対する言葉ではなくて、社会の責任の取り方、社会の在り方というところでは、今危ないぞ、ここで何とか障がい者のところから声を上げてつながっていかないと大変な事になるという警鐘を鳴らしているのではないでしょうか。